

2020 年 4 月 21 日

(株) ジャパンリスクソリューション

中世ヨーロッパを襲った黒死病（ペスト）

1347 年にヨーロッパに上陸した黒死病（ペスト）は 1370 年頃、一応の終息をむかえるまでに当時の人口の約半数おおよそ 7,000 万人の犠牲者を出しました。現在の新型コロナウイルス禍について、中世ヨーロッパで蔓延して人々を恐怖のどん底に陥れた黒死病（ペスト）が今の欧米人のトラウマになっているのではないかと思います。いろいろな図書をあたってみましたので、その中から印象的なことを抜き書きしてみました。皆様のご参考にレポートいたします。

最後の「黒死病がもたらしたもの」がとても不気味ですが、大きな歴史的なものの見方として、このような見解がありうるのでしょうか。また、貿易、旅行、通信手段の発達で元来風土病だったペストを未知の国々にもたらし、文明の進化が逆に人類に災いしているという示唆は、新型コロナについても当てはまりそうです。

<引用図書>

- ① 木村尚三郎「苦難の時代」（世界の歴史「中世ヨーロッパ」中央公論社 1961 より）
- ② ジョン・ケリー「黒死病ーペストの中世史」中央公論新社 2005
- ③ 村上陽一郎「ペスト大流行」岩波新書 1983

黒死病の恐怖

- ・ ペスト、それはまったく突然に、しかも音もなくやってきた。身分と階級を問わず、王侯貴族も、聖職者も、農民も、すべてこの死の手から逃れる確実なすべを見出すことはできなかった。見えざる死の手がいつ自分をとらえるかもしれないという恐怖と不安、それはおそらく現代人の放射能への恐怖につながるであろう。いなむしろそれ以上により強烈なものがあつたにちがいない。①
- ・ 中世の黒死病（black death plague ペスト）はこの 1 千年間で特に重大な事件の一つに数えられる。その後何世紀にもわたって暗い影を落としたこの疫病は、依然として西欧諸国の集合記憶の一部を占めている。②

黒死病の伝播

- ・ 発祥地は内陸アジアのモンゴルとキルギスのあいだの、いまだ辺境とされるどこかで、ひょっとしたらずっとそこにとどまっていたかもしれなかった。しかし、13世紀にモンゴル人がユーラシア大陸の大部分を統一し、その結果、伝染病の拡大に重要な役割を果たす3つの活動—すなわち貿易、旅行、より効率のよい大規模な通信網の発達によって、事態は一変した。モンゴル世界に通信の改良をもたらしたのはタタール版の早馬郵便ともいべきジャムチ（駅伝制度）だった。内陸アジアからは、黒死病の指先が当方に向かって中国まで伸び、もう一つの指先が西方に向かって、大草原地帯を渡り、ロシアまで達した。1340年代半ばのある時期、西方に拡大した黒死病はクリミア半島のイタリア植民地に到達し、避難した船乗りたちがそこからヨーロッパや中東にこの伝染病をもちこんだ。②
- ・ 病魔は、商船の無許可同乗者である鼠ども、そのまた無断寄生者である蚤だとか、病人の咳、痰や衣類の中にひそんでいたのである。①
- ・ 黒死病は、1347年の秋にはシチリア島に伝播し、更に急速に北上してヨーロッパ大陸に達した。1348年の3月には、イタリアの中部と北部の大半がすでに汚染されていた。春には、スペインと南フランス、バルカン半島に達していた。夏には、北フランスやイングランド、アイルランドに到達し、晩秋になると、オーストリアに侵入し、ドイツを脅かし、それから2年のうちに、スコットランド、北欧、ポーランド、ポルトガルなどヨーロッパ周縁地域を汚染した。早駆けの馬以上に速く移動できるものがなかったこの時代に、黒死病はヨーロッパを4年足らずで一周してしまったことになる。②

黒死病の症状

- ・ 黒死病というのは、死相を呈した患者の皮膚の色に対してつけられたものである。ペストには腺ペスト、肺ペスト、皮膚ペストの三種類がある。このとき大流行を見たのは主として腺ペストであり、それに恐るべき肺ペストが加わった。①
- ・ なんとなく首や腋の下、もものつけ根がはれてきて、まもなく高い熱が出てきて全身は悪寒に襲われ、やがて意識が混濁し、うわ言をいうようになる。からだのあちこちでできた腫瘍がくずれただれ、哀れな犠牲者は確実な死への道をたどっていく。腺ペストは今日でも死亡率50%から70%という怖い病気なのだ。肺ペストとなると、これはもう絶望的だった。死亡率はほとんど100%に近い。①

黒死病による死者数

- ・ ブルゴーニュの一教区の史料によると、1,200人ないし1,500人いた一つの豊かな村では、わずか3,4カ月の間に649人、つまり人口の半分が死滅してしまった。モンペリエでドメニコ派修道僧140人のうち7人を除いて斃された。①
- ・ この黒死病によって、いったい何人が死んだのか、その数は正確にはわからないが、ヨ

ヨーロッパの死亡率は33%だったという説が定着している。1347年から1352年までに、欧州大陸の住民7,500万人のうち2,500万人が死んだことになる。黒死病は特に女と子供に襲いかかり、男よりも多くの死者を出した。感染の危険は戸外よりも屋内の方が高く、家の中で過ごす時間は女子供の方が男たちよりずっと多かったからだろう。中世の人々は、大量死のあまりの規模の大きさに愕然とした。②

- ・ 中東と北アフリカのイスラム社会でも、人口のほぼ三分の一が死んだ。中国の場合は、慢性的な内戦状態にあったので、ペストによる死亡率を算定するのは容易ではないが、1200年から1393年までに人口が50%も減り、およそ1億2,300万人だったのが、6,500万人まで落ち込んだ。この黒死病による人口学的な打撃を今日の世界にあてはめれば、およそ19億人の人命が失われたことになる。②

恐怖におののく人々

- ・ 多くのヨーロッパ人にとって、黒死病は怒れる造物主が下した神罰に思えた。1349年9月、イングランド王エドワード三世は「義なる神が人の子らに天罰を下し、全人類を鞭打つときがいよいよ来た」と言明した。このあまりにも大規模な死に対する唯一納得のいく説明は、人間の悪行であった。ただでさえ反ユダヤ思想の過激な噴出が目につくようになっていた中世において、「大いなる死」はとりわけ過激な反ユダヤ感情の暴発のきっかけをつくった。②
- ・ こんな有様だから、人々のあいだにはいろんな噂が乱れ飛んだ。噂のうちで現実に最も影響の大きかったのは、ペストはユダヤ人が泉や井戸に毒を入れたためだというものであった。南フランスの諸都市とりわけナルボンヌ、カルカソンヌ、それにドイツのライン川沿岸地方の諸都市では、人々は怒り狂ってユダヤ人を迫害し、数多く焼き殺した。宗教が違い、商才にたけ、金儲けのうまいユダヤ人に対する彼らの反感、悪感情と蔑視の念には、もともと非常に根深いものがあつた。何にむかって怒りをほとぼしらせ、たたかったらよいのかわからない彼らの不安定な焦燥感、これこそが黒死病とユダヤ人とを無批判に結びつかせたものであつた。①
- ・ ペストの流行に一種のパニック状態になった人々の間には、日ごろ憎しみを抱いている相手をスケープ・ゴートに仕立て上げる風潮が生まれていたのである。③

パンデミックの条件

- ・ 「パンデミック」(pandemic)とは「エピデミック」(epidemic 伝染病の)から派生した語と考えられるが、この「エピデミック」はデモクラシーの語源でもある「デモス」(demos 民衆)に基づいており、「人々の間に広く行きわたる」という意味である。したがって、「パンデミック」というのは、病気が「世界的規模」で流行するという状態をあらわしている。③
- ・ 社会や人口も状況いかんではペストの危険因子となる。その他の伝染病と同じく、ペス

- トを維持させるためには、最低 40 万人の人口基盤を必要とする。それを下回るとき、または人口の分布がまばらな場合、感染連鎖の切断が始まる。衛生状態も影響する。②
- ・ 20 世紀初頭に中国とインドが経験したペストを見る限り、衛生状態と同じく、栄養失調が危険因子になることが示唆されている。胎児のときに低栄養状態でいると、免疫系の発達が阻害され、生涯にわたって一般的な疾患にかかりやすくなることが最近の研究からわかっている。②
 - ・ ペストの発生を促す条件は広範囲にわたる暴力、混乱、栄養失調、不潔さなどである。中世初期のヨーロッパ人が体を洗ったり、服を着替えたりした回数がせいぜい年に 1,2 回だったという事実はキリスト教世界でもあまり公言されていない。②

隔離政策の有効性

- ・ イスパニアのアラビア人医師イブン・ハーティマーは 1348 年に、「サレという町のイブン・アブ・マドイアンという男は、ペストの伝染を強く信じていたので、自分の全財産を注ぎ込んで、食物を買い貯蔵し、多くの住民を一箇所に集めて、壁をめぐらしてその中に隔離し、外界から完全に隔離させたところ、サレの町の他の住民はペストによってほとんど死に絶えてしまったにもかかわらず、その囲いのなかの人々は、誰一人としてペストに罹患したものがなかった」と記録し、隔離の効果を明確に理解していた。③
- ・ 金持ちの中には、屋敷を閉鎖して、身を守ろうとする人々も現れた。時間の経過とともに隔離のという概念は少しずつ制度化され始めた。ベネツィアでは、ペストが流行する地域から渡来する船の入港を差し止める措置をとったり、ミラノでは、ペスト患者を出した家を閉鎖して立入禁止にしたり、病人を郊外に運び出し、街中には置かないという決定を下したりした。③
- ・ ペスト患者に付き添っていたものは、10 日間は町に戻ることができず、町の人と会うことも許されない。司祭と医師はペスト患者と分かれば届け出なければならない。このような規定に違反したものは、財産をすべて没収され、その身は焚刑に処せられる。③
- ・ 「隔離」が病気の蔓延を防止するという名目における患者の遺棄に近い内容をもっていた。今日でも流行病の患者を出した家が社会的に白い目で見られ、弾劾されるという不幸な事態は起こりがちである。③

黒死病がもたらしたもの

- ・ ペストは恐ろしい苦しみをもたらしたが、その一方で、生きるか死ぬかの可能性が曖昧だった不安定な将来からヨーロッパを救ったのもペストだった。黒死病が到来した 1347 年の秋、ヨーロッパはマルサス学説のいう行き詰まり状態にあった。2 世紀にわたって人口の急増が続いた結果、人口に比して食糧生産量が追い付かなくなりそうだった。どこを見ても生活水準は下がり、悪化していた。貧困、飢餓、栄養不良が広まっていた。社会の流動性は失われ、技術水準の流れもよどみ、新しい発想や奇抜な考え方は危険な

Japan Risk Solution

異端思想として抑圧された。②

- 黒死病の大量死とその後のさまざまな病気の襲来によって、そのマヒ状態が終わりを告げ、ヨーロッパは再び勢いを取り戻した。人口が激減したため、生き延びた人々には十分な資源の分け前ができた。「より多様化した経済、より集約的な資本投下、より進んだ技術、生活水準の向上、これらは中世後期における経済の突出した特徴である」と歴史家のデヴィッド・ハーリヒーは言う。絶え間ない死の恐怖が1世紀も続いたあと、ペストと疫病の死者を収めた死体安置所の中から、ヨーロッパはすっきりと洗われ、新しくなって蘇った一雨のあとの太陽のように。②
- (人口激減による) 農業労働力の決定的不足が農民の立場を強くすると同時に、自営農および労賃を払われて農業に従事する農民層を増加させていた。需給の関係は一方的であった。労賃は高騰を続けた。領主は仕方なく支払えない労賃の代わりに、土地を農民に賃貸するという名目で下げ渡す、という最も望ましくない手段を取った。黒死病は少なくとも資本主義の発生に決定的なギアを入れたことになる。③

以上